



2025年度

青年部いろいろ活動報告!

—次はあなたも一緒に—

日教組青年部主催

第16回 TOMO-KEN (青年教育実践交流集会)

2025年10月11日~12日の2日間、「第16回 TOMO-KEN」が東京で開催されました。今年度は全国から140人の参加があり、広教組から2人が参加しました。



2日間にわたる交流を通して、働き方改革や教職員の未配置、長時間勤務など、学校現場が抱える現実の厳しさを改めて実感した一方で、「子どもたちのゆたかな学び」や持続可能で働きやすい職場づくりへの思いが集まる場となりました。

全体会では、「職場の当たり前にとらわれず、物事を広く見つめる視点を多く学ぶ必要がある」という言葉が心に残っています。経験が少ないからこそ、固定観念にとらわれずに、広い視野で物事を多面的に捉えることが重要だと改めて感じました。

分科会では、互いの悩みや課題を率直に話し合い、議論を深めていきました。困難な社会制度や差別の問題もある中で、多様な視点を持ち続けて学び続ける教職員の姿勢が求められると感じました。多様な価値観や文化背景を持つ子どもたちが安心して過ごせるためには、教職員だけでなく保護者や地域とも連携して包括的なサポート体制を作ることが大切だという意見も共感できました。全国のなかまとの意見交換を通じて、異なる視点や考え方への理解を深める貴重な体験となりました。

全体会の挨拶では、相田みつをさんの詩「出逢い」が紹介された。「その時の出逢いがその人の人生を根底から変えることがある」とどんな仲間とお話できるのか、ワクワクした。

分科会は小・中・高の教職員が集まった。全国に同じ悩みを抱えている仲間がいて、それを乗り越えた仲間がいた。議論が進むにつれて、学級や児童を取り巻く様々な環境や、保護者との関係づくり、教職員のスタンス、職員室でのやりとりなど、学級の表面的な課題を越えた話題がでてきた。人間関係は勝ち負けではないということを伝え、相手の良さを見つけて認めることの大切さ、「ありがとう」「ごめんね」という言葉がやさしいコミュニケーションに繋がるといことなどを、子どもたちが納得できるようにし、周囲の人と共にしなやかに生きていけるように伝えていきたいと議論を経て改めて思った。

また、中・高の教職員との意見交流をとおして、子どもたちに伝わらないもどかしさを感じる日々だが、これから関わる教職員をはじめとする大人たちが繰り返し伝えてくれるはずだという心強さを胸に、根気よく子どもたちと向き合いたいと思う。



玉田さんの講話を聞いて、大久野島へ

広島で平和教育をこれまで受けてきて、またこれから教える身として、ずっと被害の面ばかりを教わり、教えていたなど感じた。日本の加害の面に目を向けることの大切さや、それによる被害は未だに続いていることを実感した。

「歴史」という言葉を使って事実を語ることは、自分は当事者ではないと言ってしまうことと同義あり、何か問題が起きたとき、他人事だと思っただけでは危険です。重要なのは事実を知識として取り込むだけでなく、個人の当事者意識を育てることです。そしてそれは、これから先起こるかもしれない、国家間の争いや環境破壊などの問題に対し、自分自身の現在の立場からだけでなく、他者や未来の視点からも考えながら、自分たちの進むべき道を正しく判断することに繋がると思います。

私は大久野島について毒ガスを作っていた島だったという浅い知識しかありませんでした。講話を聞いてから島の遺跡を見ると理解が深まりました。加害の事実を目を背けず、向き合っていくことの大切さも教わりました。今までを振り返ると、どうせ無理なことだと無意識に判断してしまうことが多い気がします。自ら働きかけることをしていきたいです。

フィールドワークを通して、島全体が戦争に関わっていたんだと感じました。少し歩く度に毒ガスに関わる跡地があり、当時ここにいた人は不安な思いをもって生活していたんだろうなと想像しました。また、戦争は「終わったら終了」ではなく、戦争の尻拭いは後世に生きる人たちが負わなければならない、と考えました。毒ガスの処理から戦争について知り、それを伝えられる人間になれるようにこれからも頑張ります。

子どもたちに授業をする上で、何を伝え、どう変わってほしいのかを意識するようにしていますが、平和学習では特にそれが難しいです。「こんなことがあったんだ」だけで終わらせないためにどんな授業にすればいいのか、これからも考えていきたいと思っています。



① 長浦毒ガス貯蔵庫跡



② 発電場跡

広教組青年部主催 大久野島フィールドワーク

1月31日、呉ブロックの玉田文男さんを講師に、「加害の歴史をどう受けとめ、どう伝えるか」をテーマに、講話とフィールドワークを行いました。広教組青年部だけでなく、中国ブロック青年部、未組合員、家族も含め、47人が参加しました。

高校時代に行った時の大久野島と、今日お話を聞いてからの大久野島の印象がガラッと変わりました。知識の偉大さと大切さ、無知の怖さを過去の歴史から感じる1日でした。そして、今日聞いたこの知識をどうしていくか、行動をどう起こすか、ただ伝えるだけでいいのか、様々なことを考えながら港でフェリーを待ちました。とても勉強になりました。

現在、ちょうど6年生で戦争についての単元を教えているタイミングだったので、今回の大久野島の歴史に関する話を、さっそく来週の授業でしてみようと思います。“自ら行動せずして、何も与えられはしない”という言葉が、心に残りました。



④ 毒ガス貯蔵タンク



③ 自動交換器室（通信壕）跡



中国ブロック青年部主催

第60回 日教組中国ブロック青年教育労働者の集い

2025年11月29日(土)~30日(日)、第60回日教組中国ブロック青年教育労働者の集いが島根県浜田市で開催され、広教組から10人が参加しました。全体会では前田良さんから「性の多様性について～子どもたちが安心して生活できる学校～」と題して、講演をしていただきました。その後、①解放教育②平和教育・環境・公害③組織強化・拡大④職場の民主化の分科会に分かれて議論を深めました。

今回初めて中ブロに参加し、「平和教育」分科会で提案しました。他県では、平和教育のやり方やどのタイミングで行うのかを悩んでいるなかまがたくさんいました。その中で自分が国語科の授業で行ったことや沖縄に行って学んだことなどを提案しました。提案を通して、実際に行って見て、聞いて感じるということがとても大切なことと改めて学ぶことができました。平和教育を行う以上、自分自身が学んでいかないといけないと思いました。2日目の意見交流では、様々な情報交換をすることができました。県によって組合活動のとりくみや学校の中での仕事量など様々な違いや課題があるなど感じました。「いいな」と思った組合活動は、支区などの活動でとりいれたいと思いました。

社会では、LGBTQなどと、カテゴライズされがちである。だからこそ、「一人の人」として捉えていける社会が大切だと感じた。現場でも、「男は・・・、女は・・・」という考えで動いている教職員はいる。そのことで子どもが苦痛に感じていることもある。クラスの中には、「性のことで悩んでいる子どもがいる」という前提で、とりくみや話の内容などを考えていく必要があると感じた。

分科会は、「平和教育」分科会で司会者として参加した。協議の視点を「学校現場で実践できる平和教育」とし、自分の中で「子どもに平和について語る時に課題だと感じていること」といった「問い」を持ってもらった。平和教育を進めるには、広島だけではなく、沖縄や長崎も知っておく必要があると感じた。自分たちが「実際に見て、感じたことを子どもたちに語る」ことが大切であることを参加者と共有した。



前田良さんの講演では、性別のことで悩んでいる子はもちろん、相談された子も悩んでいることがあるかもしれないということに、ハッとしました。それぞれの立場に立って寄り添いながら、いろんな方面からサポートする力が必要であるということに改めて気づかされました。

「職場の民主化」分科会では、アンケートの結果をもとに、どのようなことが職場で課題になっているのかを明らかにし、それぞれの職場の実態を交流しました。民主的な職場づくりのために、お互いに声を掛け、すぐに助け合える関係づくりが大切だと感じました。悩んでいること、負担に思っていることを伝えられる安心感と、すぐに助けられる、一緒に考えてくれるなかまがいることで、心の負担も軽くなるのではないのでしょうか。自分の職場でも、「困っているな、大変そうだな」と感じる人がいたら、「大丈夫？」と声をかけてあげられる人でありたいと思います。

講演では、性の多様性に関する基礎的な考えだけでなく、実際に相談を受けた際の心構えや、知っておくべきこと、気を付ける点について、具体的な事例を交えながら分かりやすくお話いただきました。中でも特に印象に残ったのは、「カテゴリ分けをしない」という言葉です。「男性」「女性」「LGBTQ」といった枠に人を当てはめるのではなく、目の前にいる一人ひとりと丁寧に向き合い、その人自身を大切にしている姿勢こそが何より重要である、というメッセージに深く心を打たれました。

今回の講演を通して、性の多様性は特別な誰かのための知識ではなく、私たち一人ひとりの日常に直結するものであり、何よりも「どう向き合うか」が問われているのだと感じました。今後、職場や日常の中で人と関わる際にも、この学びを生かしていきたいと思っています。